

第3回あらかわ俳壇

投句数	301句
投句者数	76名
兼題	星月夜、芙蓉、ぶどう、花野
期間	平成28年8月1日(月)～平成28年9月2日(金)

特選	一房の葡萄両手に余しけり	竹野 美恵子さん
選評	葡萄は五、六月には房状の花をつけ、八、九月には房となり実が熟する。両手に余る一房の葡萄の量感である大きさ、重さがリアルに享受される。平明さを余情とした味覚の秋たけなわの存在感のある句となった。(佐々木忠利氏)	
入選	ふと父母にゆき逢へさうな花野かな	松本 光章さん
	剥落のつづく白壁花芙蓉	大久保 須美子さん
	瀬戸内の黒き島影星月夜	小川 一夫さん
	振り向けば花野を渡る風の精	水田 京二さん
	弟に負けじとぶどう口に入れ	一色 由美子さん

第4回あらかわ俳壇

投句数	501句
投句者数	103名
兼題	立冬、酉の市、落葉、大根
期間	平成28年11月1日(月)～平成28年12月1日(木)

特選	酉の市この世の間にのまれけり	柴田 健次さん
選評	鷲神社の酉の市は、煌々と華やかな熊手と人の熱気でまるで別世界です。この句は単に夜の暗さではなく、その明るい光の塊がすっぽりと、現代という時代の間に飲みこまれてしまうような不安を感じます。(対馬康子氏)	
入選	立冬や切り口白き薪を積む	大越 源一さん
	足元を前頭葉に似る落葉	金沢 寛さん
	白髪の人黙礼落葉搔く	土定 弘積さん
	落葉降る意志あるものの如く降る	西村 悦さん
	大根の詠へ向きの切られ様	戸矢 晃一さん

第5回あらかわ俳壇

投句数	271句
投句者数	50名
兼題	節分、冴え返る、下萌、梅一切
期間	平成29年2月1日(水)～平成29年3月1日(水)

特選	フクシマの静かな浜辺冴え返る	田中 礼子さん
選評	フクシマの静かな浜辺と聞けば、ぶり返す寒さを感じる様なあの3.11を思い出す。遅々として進まぬ復興への道のり、離れ離れになって暮らす家族や地域住民への思い、何時になったら本当の春が来るのか。作者の思いの深い句。(佐々木忠利氏)	
入選	百幹の竹の静止や冴返る	大塚 とき子さん
	下萌えの色に大地の息吹見ゆ	坂本 久男さん
	節分の鬼給食を運びくる	高安 政江さん
	下萌を踏む兄弟の秘密基地	吉本 つま子さん
	老木の幹より清き梅一輪	若林 清子さん